

## 「形容詞+名詞」とそれに先だつ修飾成分：連体と連用の交替をめぐる

著者	光信 仁美
雑誌名	研究論集
巻	99
ページ	133-150
発行年	2014-03
URL	<a href="http://doi.org/10.18956/00006067">http://doi.org/10.18956/00006067</a>

## 「形容詞＋名詞」とそれに先だつ修飾成分

— 連体と連用の交替をめぐる —

光 信 仁 美

### 要 旨

「善良な/善良で信心ぶかい男」や「米粒ほどの/ほど小さい花」における連体修飾成分「善良な」や「米粒ほどの」と連用修飾成分「善良で」や「米粒ほど」は、入れ替えても名詞句が表す意味内容は変わらない。本稿では、「形容詞＋名詞」に先だつて用いられる修飾成分の中で、このような連体と連用の交替可能性が、一般に、どのような形式の、どのような用法において成立するのかを考察した。その結果、「形容詞＋名詞」を修飾する仕方には並列用法と修飾用法があり、先だつ修飾要素が形容詞・形容動詞の場合は主として並列用法において、「ような/ように」「ほどの/ほど」に導かれる句の場合にはもっぱら修飾用法において、それぞれ交替が可能であるという結論を得た。

キーワード：連体と連用の交替、連体修飾、連用修飾、連体動詞句、形容詞＋名詞

### 0. はじめに

次の例をみてみよう。

- (a) 米粒ほどの小さい花
- (b) 米粒ほど小さい花

(a) では「米粒ほどの」が「花」を連体修飾し、(b) では「米粒ほど」が「小さい」を連用修飾し、「ほどの」と「ほど」のそれぞれを伴う修飾句は文法的に異なるはたらきをしている。しかし、これらの名詞句全体が表す意味内容はほぼ同じである<sup>1)</sup>。

このように、連体と連用のどちらが用いられても意味が変わらない現象を、連体と連用の交替とよぶ<sup>2)</sup>。拙稿 (2013) では、「お城のような大きい家」と「お城のように大きい家」のように、名詞句「XなN」(「Xな」は形容詞・形容動詞<sup>3)</sup>、Nは名詞) に先だつて用いられる修飾成分中で、連体と連用の交替が可能となりうる形式の代表例として、「Nのような/ように」(Nは名詞) の場合の交替可能性の条件を考察した。本稿では、これを補完するかたちで、「Nのような/ように」に限定せず、名詞句内で「XなN」に先だつて用いられる修飾成分中での連体と連用の交替可能性が、一般に、どのような形式の、どのような意味用法において成立するのかを考

察する。すなわち「XなN」に先だつ成分の、交替可能な領域を探ることが本研究の目的である。<sup>4)</sup>

まず、主として1では交替不可能な場合をとりあげ、2で交替可能な場合をとりあげる。

なお、本研究は、収集した実例を帰納的に分析し、文法を現象として記述するという立場をとっている。実例は稿末に掲げた資料から収集し、名詞句抽出の便宜上、「XなN」が述語として文末に用いられているものを考察の対象とした。主語や補語になっているものについては考察されていない。資料の偏りによる影響は、今後、必要に応じて修正していきたい。

## 1. 主として交替不可能な場合

「XなN」に先だつ修飾成分のうち、連用と交替不可能な連体修飾成分にはノ格の名詞が、連体と交替不可能な連用修飾成分には副詞がある。まず、ノ格の名詞を、次いで副詞をとりあげる。

### 1.1 ノ格の名詞の場合

名詞に連体助詞「の」がついて連体修飾する形(ノ格)<sup>5)</sup>が「XなN」に先だつ場合に、交替可能な形式として、その名詞を語幹とする形容動詞の連用形が想定されるが、ほとんどのノ格の名詞が形容動詞化することはない。したがって、後述する一部の例外を除いて、ノ格の名詞は基本的に交替不可能であるといえる。

#### 1.1.1 「関係的なむすびつき」と「状況的なむすびつき」の場合

次の例をみてみよう。

- (1) これが私の悪い性格だ。(金閣寺)
- (2) 彼女はザ・フォーク・クルセダーズの熱狂的なファンだったので(水辺のゆりかご)
- (3) それは十月末の明るい一日である。(金閣寺)
- (4) なにか、この地方の、特別な風習なのだろうか。(砂の女)

鈴木(1978)<sup>6)</sup>は、ノ格の名詞と名詞との結びつきについて考察したものである。そこでは、(1)(2)の「私の性格」「ザ・フォーク・クルセダーズのファン」のように、被修飾名詞とノ格の名詞の間に一定の関係がある結びつきを「関係的なむすびつき」といい、(3)(4)の「10月末の一日」「この地方の風習」のように、ノ格の名詞が、被修飾名詞の存在や実現の外的な条件、すなわち、時や場所などを表している場合のむすびつきを「状況的なむすびつき」として区別している。

ここで(1)~(4)のノ格の名詞を形容動詞の連用形である「~ニ」でおきかえてみると、次の

ようになる。

- (1') 私に悪い性格
- (2') ザ・フォーク・クルセダーズに熱狂的なファン
- (3') 十月末に明るい一日
- (4') この地方に特別な風習

(1')～(3')は非文法的な文になり、(4')は(4)と異なる意味を表している。したがって、ノ格の名詞と名詞との関係がこれらの関係である場合、ノ格を連用修飾成分の形式でおきかえられない。以下に、収集した用例の中から他の例をあげる。

「関係的なむすびつき」

弟の黄色い長靴 サッチャンの新しい彼氏 ミッキーの忠実なペット  
あいつの悪い癖 少女の大きな瞳 僕の批判的なことば 彼のすばらしいところ  
噂の面白いところ 森の快い匂い 風の忠実な形 サッカー部の中心的な男

「状況的なむすびつき」

ひさしぶりのよい天気 さっきの逞しい新入社員 最後の絶対的な休暇

### 1. 1. 2 「規定的なむすびつき」の場合

鈴木(1978)は、ノ格の名詞と名詞との関係の三つ目として、ノ格の名詞が被修飾名詞の性質を表す場合をあげ、「規定的なむすびつき」としている。次の例の「十円ばかりの」「二つ星の」はそれぞれ「本」「安ホテル」の性質を表している。

- (5) 「何か、反対なことを書いた、十円ばかりの、薄っぺらい本でしたっけ……」(砂の女)
- (6) 私はケチだから、いつもせいぜい二つ星の小さな安ホテル。(さようなら)

これらの例では、ノ格の名詞と「XなN」の形容詞Xが、名詞で表されるモノの性質を並列して表している。この場合にも、ノ格の名詞と交替が可能となる連用修飾成分は考えられない。

しかし、「規定的なむすびつき」のうち、ノ格の名詞が被修飾名詞を修飾するだけでなく、<様態><程度><原因>の意味で、「XなN」の形容詞Xが表す性質を詳しくする=修飾する場合がある。このような場合には交替の可能性はある。以下にまず、ノ格の名詞がXを意味的に修飾している例をあげ、そのうち交替可能な場合について考察する。

<様態>

- (7) …電話機は、…ずんぐりした黒いダイヤル式のもので、受話器が重い、ベルの音も、もちろん、今風のやわらかなものではない。(返事はいらぬ)

<程度>

- (8) やはり、三十代の、若い作者である。(三十一文字のパレット)
- (9) 色の浅黒い、大学出みたいな感じのまだ若い署長でした。(人間失格)

- (10) …男の視線を感じなくなったことが、一番の大きな変化だった。(夜離れ)  
(11) むろん、逆光でやっと目立つ程度の、淡い靄だったが、それでも・・(砂の女)  
(12) 「これは幼稚園児用ではないのか」と目を疑うほどの貧弱な内容なのである。

(無印失恋物語)

<原因>

- (13) 晴美は、戸村を実際に見るまでは、何となくスター気取りの嫌なヤツとおもっていたのだが、(三毛猫ホームズの追跡)  
(14) しかし相手はいつも十人ぐらいで行動している連中である。それに今日はサイがいつ来るかわからない状態の一番大事な日である。(岸和田少年愚連隊)

例(7)、(10)～(12)の名詞句内において、「XなN」に先だつノ格の名詞は、次のように連用修飾成分でおきかえても、名詞句全体としての意味はほぼ同じである。

- (7') 今風にやわらかなもの  
(10') 一番大きな変化  
(11') 逆光でやっと目立つ程度に、淡い靄  
(12') 目を疑うほど貧弱な内容

ただし、ここで交替可能なノ格の名詞は、モノを表す典型的な名詞ではなく、「今風」「一番」のような、形容詞的または副詞的な意味をもつ名詞である。「今風」はモノの性質を名づけた名詞だが、「今風な」という形容動詞の語幹でもあり、その連用形「今風に」は後続する形容詞Xを詳しくする。また、「一番の」は、意味が比較の程度を表す意味に変容し、副詞「いちばん」と同じ意味を表している。

さらに、ここで交替可能となるっている名詞「程度」「ほど」は、必ず連体修飾をうけて用いられる形式名詞となっている。これらの形式名詞は「程度に」「ほど(に)」の形をとって連用修飾句をつることができるので、交替可能となる(2.2参照)。

なお、このほか「一つの新しい発見」「一種の仰々しい舞踏」など、数量を表すノ格の名詞の場合も連用修飾成分との交替は不可能である。

## 1.2 交替不可能な連用修飾成分

「XなN」に先だつ連用修飾成分のうち、連体修飾成分との交替が不可能なのは副詞である。

なお、形容詞や形容動詞の連用形が副詞として用いられることがある。その場合、形式的には連体形が対応し、交替が可能のように見える。しかし、副詞となった連用形はその意味がもとの形容詞や形容動詞から変容していて、意味的に連体形との交替が不可能となっている。(だからこそ副詞として同定されているのである。)たとえば「おそろしく長い時間」「非常におもしろい議論」の中の連用形「おそろしく」「非常に」の意味は、連体形「おそろしい話」「非常

な事態」とは意味が異なり、程度が高いことを表している。ゆえに、連体形との交替は不可能である。以下、副詞の種類ごとにみていくが、例外がみあたらない場合は交替不可能であることに逐一言及しない。

### 1.2.1 程度副詞

まず、(後の名詞を修飾する)形容詞が表す性質の程度を表すものが多い<sup>7)</sup>。

(15) 芝居の中では、嫂も縫子も非常に熱心な観客であった。(それから)

(16) だから一旦約束した以上、それを果たさないのは、大変厭な心持ちです。(こころ)

(17) あれはなかなか楽しいレストランだった。(うずまき猫のみつけかた)

(18) 「おまえ、そりゃちょっと極端な発想じゃないか？」(ほくは勉強ができない)

例(15)(16)の副詞には次のような対応する連用形が考えられるが、同じ意味を表すことにはならない。また、(17)「なかなか」は「なかなかの」と交替可能であるが、意味が変容している。そのうえ(17)の「なかなかの」と「楽しい」は並列して後の名詞を修飾するようになっている。したがって、連体と連用の交替とはいえないであろう。

(15') 非常な熱心な観客

(16') 大変な厭な心持ち

(17') なかなかの楽しいレストラン

以下、収集した用例から程度副詞が先だつ場合の例をあげておく。

とてもやさしい先生 よほど気楽な人 割合高価な品 ちょうどいい散歩道

ほんの短い間 至極閑静な住居 すごく幼稚な機械 けっこうむずかしい人

相当高い所 少し眠い昼 随分保守的な国 すこぶる日本的な日本人

きわめて稚拙な感動 かなり不思議な体験 ごく自然な感情

程度副詞の中には次のように比較性をもつ場合がある。

(19) あらゆる化合物のなかで、水は、もっとも単純な化合物である。(砂の女)

(20) …ディレクターに比べれば、音声というのはずっと地味な仕事だ。(きみのため)

(21) 私は先生をもっと弱い人と信じていた。(こころ)

(22) 「ほら、ご覧。ここが世界でいちばん美しい街なんだよ」(バルセロナの休日)

このうち「いちばん」は1.1でみたノ格の名詞「いちばんの」という連体修飾成分と交替可能である。

また、程度副詞には次のような評価性のあるものも多い。

(23) 今日のは特につめたい雨だったので、・・(つれづれノート)

(24) 聞いた限りじゃ、おっそろしく怖い親父さんだったそうだから」(返事はいらぬ)

(25) 三階建てにしてはばかに安っぽい入口だなと思ったら・・(どくとるマンボウ昆虫記)

(26) ユーモラスな歌い方ではあるけれど、内容は意外と厳しい一首である。

(三十一文字のパレット)

例(24)(25)(26)においても、次のような対応する連用形が考えられるが、名詞句が同じ意味を表すことにはならない。

(24') おそろしい怖い親父さん

(25') ばかな安っぽい入口

(26') 意外な厳しい一首

以下、収集した用例から評価性のある程度副詞が先だつ場合をあげておく。

ほんとうにこわい話 あまりにも不用意な発言 よほど奇怪な存在 やたら長い一日  
あそこまでケチな人 もうちよとロマンチックな部員 底知れずおそろしいところ  
まだまだ幼い年齢 何か不思議な戸惑い 何かしら無残な光景 どこか寒々しい青  
なんだか変てこな名 そんなに辛いバイト ひとえに優しい気もち あんまり情ない女  
何とも不思議な感覚 見るからに変な人 ひとすら美しい国 いかにも適切なことば  
どことなく坊さんくさい人 何となく重苦しい感じ どうにも厄介なところ  
こんなにも単純な仕組み ほとんど自己満足的な生物 それはそれは静かな夢

なお、否定と呼応する副詞が、程度的な意味をもって、否定形式で表される性質を修飾することがある<sup>8)</sup>。

(27) この女、ちっともこりない人だなあ、(僕は勉強ができない)

(28) しかし、大竹一郎の取り柄は、それほどにも役に立たない取り柄だった。

(勝手にしゃべる女)

### 1.2.2 量副詞

程度副詞と異なって、量を表す副詞が「XなN」に先だつと、名詞があらわすモノを修飾し、その量を詳しく表すことになる。

(29) この無数の灯が、悉く邪まな灯だと思つと、私の心は慰められる。(金閣寺)

(30) 今大量に売られているものは、みんな安直なコピーですよ。(返事はいらぬ)

### 1.2.3 様態を表す副詞

いわゆる様態副詞は動詞を修飾し、その動きの様子を表すのだが、次のように、形容詞を修飾し、その性質や状態の、様態を表す副詞がある。

(31) (桜が) 散れば散るほどしんと静かな光景だったが、(きみのためにできること)

(32) 実にほんのりと安らかな笑顔だった。(サンクチュアリ)

(33) …敗けた日本の選手たちが…のほんつと明るい表情だった…(生きるヒント4)

## 2. 主として交替可能な場合

「XなN」に先だつ修飾成分のうち、連体と連用の交替の可能性のある形式には、大きく分けて三つの場合がある。形容詞・形容動詞の場合、特定の形式に導かれる句の場合、動詞述語句の連体形・連用形の場合である。以下、順に考察する。

### 2.1 形容詞・形容動詞の場合

形容詞・形容動詞が「XなN」に先だつ時、連体と連用の交替がおこる。なお、その用法は、Xとの意味関係によって、並列用法と修飾用法の二つに分けることができる。

#### 2.1.1 並列用法の場合

並列用法とは、先だつ形容詞・形容動詞と形容詞Xとの間に修飾関係がなく、対等に後のNにかかっていく用法である。

次の(34)～(36)は形容詞・形容動詞の連体形が、(37)～(39)は形容詞・形容動詞の連用形がXに先だっている例であるが、連体形と連用形のそれぞれの形をおきかえても名詞句の意味はほぼ同じである。なお、並列用法において、先立つ形容動詞の連用形は「～で」の形をとる。

(34) <読む>という行為は、じつに不思議な感動的な世界です。(生きるヒント4)

不思議で感動的な世界

(35) 彼女は…気のいい、優しい性格だった。(勝手にしゃべる女)

気がよく、優しい性格

(36) この人は善良な信心ぶかい男だが、…(アメリカ感情旅行)

善良で信心ぶかい男

(37) 私のお母さまのお手は、もっとほそくて小さいお手だ。(斜陽)

ほそい小さいお手

(38) 「みせびらかして」とは、なんと切実で哀しい表現だろう。(三十一文字のパレット)

切実な悲しい表現

(39) ほとんどの苦労は私にとって捨て難く貴重な経験だった。(さようなら)

捨て難い貴重な経験

以下、収集した用例の中から、Xに先だつ形容詞・形容動詞がXと並列して用いられている例をあげる。

<連体形の場合>

人当たりのいいやさしい人 人なつつこいおしゃべり好きな女 甘いいい感じ

心配な悲しい御病気 重い豪華な闇 陰気な狭い部屋 眉の濃い唇の薄い女



不毛な無機的なもの 憂鬱な繊細な建築 性格のいい素直な方 白いきれいな手  
頭腦的な冷たい男 じれったいまぬけなおとうさん むさ苦しいかつい顔つき  
起伏の多いゆるやかな斜面 シンプルな黒い水着 若々しい小柄な美女  
大人しい仕事熱心な青年 つつましいまばらな客 豪放磊落な禅僧らしい禅僧

<連用形の場合>

固くて鋭い風 楽しくてオソロシイ本 やさしくて明るい性格 暗くて淋しい局  
誠実で一途なタイプ 地味で清楚な花 やさしくおとなしい性格 誠実で正直な男  
聡明で勝ち気な女性 おとなしくて可愛い子 素直で優しい子 貧相で下品な風貌  
悲しくせつない表現 悲しく美しい恋愛 巨大でこわい予感 静かで平和な場所  
明るくて自然な微笑み 几帳面できれい好きな女性 小柄でおとなしい女性  
ケチくさく用心深い偽善者 知的で優しそうな笑顔 風変わりで偏屈なおっさん  
微妙で危険な均衡 中性的で年齢不詳な人称 物静かでインテリジェントな人物  
なお、連体詞は活用しないので、次の例の「大きな」は交替不可能である。

(40) その足元どころがるタオル地の、大きな赤いボールだった。(サンクチュアリ)

## 2. 1. 2 修飾用法の場合

修飾用法とは、先だつ形容詞・形容動詞と形容詞Xとの間に修飾関係成り立つ場合である。この場合、先立つ形容詞・形容動詞はXで表された性質を様態の面から詳しくしている。Xに先立つ修飾成分が形容詞・形容動詞の場合、ほとんどが、上記2. 1. 1 並列用法であり、この用法は少ない。以下に例をあげる。(41)～(44)は先だつ形容詞が連体形の場合であり、(45)～(47)は連用形の場合であるが、それぞれ形をおきかえてもほとんど意味は変わらず、交替可能である。

(41) その日は、とてもなごやかないいお天気だったので、… (斜陽)

とてもなごやかでいいお天気

(42) 五時を回ると、すっかり暗くなって、大体が人通りの少ない寂しい道である。

人通りが少なく寂しい道 (ふたり)

(43) 気取るといふ事は、上品という事と、ぜんぜん無関係なあさましい虚勢だ。(斜陽)

上品という事と、ぜんぜん無関係であさましい虚勢

(44) 英語やフランス語がどこにでもだれにでも移植可能なたくましい国際語であることをあらためて実感する。どこにでもだれにでも移植可能でたくましい国際語

(さようならなんてこわくない)

(45) 「今夜は少し暖かいようだね。穏やかでいいお正月だ」(門)

穏やかないいお正月

(46) マグソコガネはあまりに小柄で地味な存在だが・・(どくとるマンボウ昆虫記)

小柄な地味な存在

(47) …決して新しくはないが、日当たりもよく悪くはない物件だった。(不夜城)

日当たりもいい悪くはない物件

ただし、次のように形容動詞が「～に」の連用形で先だつ場合は、連体形「～な」にすると並列用法の意味になるか(48)(49)、意味が破綻する(50)ので交替不可能である。

(48) 杏雲堂へ行ったのさえ精神的に随分な疲労だった。(おとうと)

精神的な随分な疲労

(49) 有為さんののは、全然叙情的じゃなくて単純におかしい話でしたよ。(私は変温動物)

単純なおかしい話

(50) 二月ごろというのは、……経済的には苦しい時期である。(勝手にしゃべる女)

\*経済的な苦しい時期

## 2.2 特定の形式によって導かれる修飾句の場合

「ような(みたいな)/ように(みたいに)」「ほどの(くらいの)/ほど(くらい)」に導かれる連体・連用修飾句は交替する可能性がある。「そうな/そうに」の場合には交替不可能であるが、「そうな/そうで」の場合に可能性がある。以下、順にみていく。

### 2.2.1 「ような」「ように」に導かれる修飾句の場合

「ような/ように」は、比喩と例示の用法において交替可能な場合がある。いずれの用法においても、「ような/ように」が導く修飾句が、後続する形容詞Xが表す性質や状態を、様態や程度のみから詳しくする用法があり、その場合に交替が可能である。以下に<比喩><例示>の用法の交替可能な例をあげるが、各例の「ような」と「ように」をそれぞれおきかえても意味はほぼ同じである。

<比喩>

(51) 舌がもつれたような、まどろっこしい話しぶり。(砂の女)

舌がもつれたように、まどろっこしい話しぶり

(52) …まるで盆おどりの歌みたいな柔い歌ばかりではないか。(二十四の瞳)

まるで盆おどりの歌みたくに柔い歌

(53) これはききしにまさるひどい映画で、唾然とするようなひどい演技だったけれど、

唾然とするようにひどい演技(うずまき猫のみつけかた)

(54) 風を押し戻そうとするように、無駄なことだとわかっていた。(返事はいらぬ)

風を押し戻そうとするような、無駄なこと

(55) それは洗いさらした防水布の色のように青白い黒人なのだ。(アメリカ感情旅行)

洗いさらした防水布の色のような青白い黒人

<例示>

(56) 相手の選抜チームは、いつまでも私たちの一対一のけんかを見ているような甘い奴らではなく、…(岸和田少年愚連隊)

いつまでも私たちの一対一のけんかを見ているように甘い奴ら

(57) 私もあなたのように極めて忙しい人間ですから…(さようならなんてこわくない)

あなたのような忙しい人間

(58) とにかくわたしたち人間は、お互い、そのように非常な存在なのです。(小さな郵便車)

そのような非常な存在

(59) ほくが、もし、本当に植草の言うように即物的な人間だとしたら、…

本当に植草の言うような即物的な人間 (僕は勉強ができない)

一方、形容詞がXに先だつ場合(2.1)と同じように、「ような」が導く修飾句がXを状態や程度の面から詳しくするのではなく、Xと並列の意味関係にある場合がある。この場合には交替不可能である。次の例では「ような」を「ように」におきかえられない。

(60) 「…その女は、味噌汁一つ作れやしないんだ。何となく流されて、夜の商売になんかなくてさ、だまされてばっかりいるような、そんな女だ。…」(夜離れ)

## 2.2.2 「ほど(くらい)」「ほどの(くらいの)」に導かれる修飾句の場合

「～ほど」「～くらい」に導かれる連用修飾句は程度を表していて、Xが表す性質の程度を詳しくする。これらの形式については、すでに、先だつ成分がノ格の名詞の場合(1.1.2)のところで、連体修飾句「～ほどの」「～くらいの」と交替可能なものとしてとりあげた。次のような連体修飾句をノ格の名詞で導く言い方におきかえてもほぼ意味は同じである。

(61) それはぞっとするくらい美しい光景だった。(キッチン)

ぞっとするくらいの美しい光景

(62) それは、言いようのないほどさびしい風景だった。(夏の庭)

言いようのないほどのさびしい風景

(63) …だから、おふくろにとっては歯噛みするほど皮肉な結果だった。(不夜城)

歯噛みするほどの皮肉な結果

(64) 孤独で、寒くて、泣き出したくらい辛いバイトだった。(無印失恋物語)

泣き出したくらいの辛いバイト

(65) その自分の「優しい心」は、自身でうっとりするくらい優しい心でした。(人間失格)

自身でうっとりするくらいの優しい心

### 2.2.3 「そうな」に導かれる修飾句の場合

「そうな」には対応する連用形「そうに」があるが、以下の「そうな」を「そうに」でおきかえると、名詞句は非文法的な表現になる。交替は不可能であるが、連体修飾句であるのに、意味的には後続のXが表す性質を様態の面から詳しくしている。

- (66) だが、ランプを囲んで座っているのは、自分と同世代の、むしろバリバリ働いていそうなまともな男たちばかりである。(パズル)

\*むしろバリバリ働いていそうにまともな男たち

- (67) 「…もちろん、地図もみた。大きな波がくれば、こっちから向こうへ、ひと跨ぎしそうな、ひよわな所じゃないか。…」(さようならなんてこわくない)

\*大きな波がくれば、こちらから向こうへ、ひと跨ぎしそうに、ひよわな所

- (68) 「…それにキッサ店での喫煙などもしないよーに」などと、朝礼で生活指導の先生がマイクの前でジャージのズボンを上げながら言っている、正しい高校なのである。

(岸和田少年愚連隊)

\*…生活指導の先生が…ズボンを上げながら言っている、正しい高校

「～そうに」でつくられる連用修飾句は「うれしそうに笑う」「笑いだしそうになる」など、形容詞ではなく、もっぱら動詞を修飾する。

一方、「そうな」が導く連体句が後続する形容詞Xを意味的に修飾するのではなく、Xと並列して用いられる場合に、連用形「そうで」におきかえられ、交替可能なことがある。

- (69) 梅子は佐川の令嬢を大変大人しそうな可愛い子だと誉めた。(それから)

大変大人しそうで可愛い子

### 2.2.4 「という」に導かれる修飾句の場合

「という」は格助詞「と」に動詞「いう」が組み合わさった形式であるが、「といった」とともに連体修飾句をつくる形式である。対応する連用形に「といて」があるが、その形でおきかえると、名詞句は非文法的な表現になる。

- (70) 実際前期の中間、期末ともに、二百人中百八十番というひどい成績だった。

\*二百人中百八十番といてひどい成績 (水辺のゆりかご)

- (71) 又、ほんの空想の中で、老師を毒殺して、そのあとに私が居据わると云った、他愛もない夢でしかなかった。(金閣寺)

\*老師を毒殺して、そのあとに私が居据わると云って、他愛もない夢

- (72) 「ほんと。それも、素敵な彼氏に逢いたいなというモノホシゲな溜息ばかり。…」

\*素敵な彼氏に逢いたいなといてモノホシゲな溜息 (さようなら)

- (73) われわれが知らされたことは、太宰君がひとり死を決して、その意志を徹底したとい

う単純な事実である。(斜陽、解説)

\* 太宰君がひとり死を決して、その意志を徹底したとって単純な事実

「～とって」は「～からとって」「～とって」の形で逆接の確定条件を表すので、「XなN」の形容詞Xを修飾して名詞句内におさまる形式ではない。

### 2.3 動詞述語句の場合

名詞句「XなN」に先だつ修飾句として、動詞述語句がある。ここでは、(74)のような連体形の動詞述語句を連体動詞句、(75)のような連用形の動詞述語句を連用動詞句という。

(74) 季節は梅雨入り前の、照りつける暑い毎日である。(金閣寺)

(75) 風が吹き抜けて、寒い日だった。(ふたり)

動詞述語句の用法も大きくわけて二つある。動詞述語句とXが並列してあとの名詞にかかっていく用法と、動詞述語句が意味的にXを詳しくする修飾用法である。

#### 2.3.1 並列用法の場合

動詞述語句とXが並列してそれぞれあとの名詞にかかっていく用法では、次の(76)～(78)のように対応する連用修飾句を想定することができ、交替可能な場合があるが、多くは(79)～(84)のように連用形でおきかえると非文法となり、交替不可能である。交替が可能であるのは、「角ばった」「澄んだ」「帯びた」など動詞の意味が状態を表す場合である。

(76) 手跡は疑いもなく鶴川の、角ばった稚拙な字である。(金閣寺)

角ばって稚拙な字

(77) 不思議と青く澄んだ、生温かい夜だった。(うたかた)

不思議と青く澄んで、生暖かい夜

(78) 上の句が全部ひらがなで書かれているのは、やや幼児性を帯びた、自己陶酔的な「あゆみ」であるためだろう。(三十一文字のパレット)

やや幼児性を帯びて、自己陶酔的な「あゆみ」

(79) 六本木駅の伝言板に伝言を書くのは、そんな生活のなかで見つけた、ささやかな気晴らしだった。\*そんな生活のなかで見つけて、ささやかな気晴らし(返事はいらぬ)

(80) この叱責は老師が殊更私を自室に招いた稀な機会だった。(金閣寺)

\*老師が殊更私を自室に招いて稀な機会

(81) 一人は私がずっと後をつけて来た若い男だ。(勝手にしゃべる女)

\*私がずっと後をつけて来て若い男

(82) 時と共に朽ちていく品々の見せる微妙な色合い。(パズル)

\*時と共に朽ちていく品々の見せて微妙な色合い。

(83) ふたりを包み込むながーい沈黙。(無印失恋物語)

\*ふたりを包み込んでながーい沈黙

(84) きちんと区画した墓地に、墓標だけがならんでいる新しい兵隊墓。(二十四の瞳)

\*きちんと区画した墓地に、墓標だけがならんでいて新しい兵隊墓

### 2.3.2 修飾用法の場合

連体動詞句が、後続する形容詞Xを意味的に修飾して用いられる用法には、〈程度〉〈様態〉〈原因・理由〉を表す場合がある。このうち〈程度〉〈様態〉を表す場合は、対応する連用形でおきかえると非文法となる。したがって、この場合は交替不可能である。なお、これらの連体動詞句は、形は連体形であるが、意味的には程度や様態、原因・理由を表していて連用的である。

まず、〈程度〉を表す用例からみてみよう。なお、〈程度〉の用法だと判断する際、連体動詞句とXが「ほど」「くらい」を介して言えるかどうかを手がかりにした。

(85) あれは今にして思えば、気分的には僕のこれまでの人生のなかでも一二を争う贅沢な振る舞いだった。(うずまき猫のみつけかた)

\*気分的には僕のこれまでの人生のなかでも一二を争って贅沢な振る舞い

(86) (現在の女子大生数は) …これは土地の値上りにも匹敵する驚異的な伸長率である。

\*土地の値上りにも匹敵して驚異的な伸長率 (さようなら)

(87) 然しそれは殆んど問題とするに足りない些細な事柄です。(こころ)

\*殆んど問題とするに足りず些細な事柄

(88) それはもう、自分だけにしか聞こえない、かすかな悲鳴だ。(砂の女)

\*自分だけにしか聞こえず、かすかな悲鳴

(89) それは、……子犬ほどもある巨大な鼠だった。(鉄道員)

\*子犬ほどもあつて巨大な鼠

(90) これはききしにまさるひどい映画で、…… (うずまき猫のみつけかた)

\*ききしにまさってひどい映画

(91) ベランダといっても、普通のアパートのそのように、洗濯物を干したら通れなくなる、狭いものではなく、…… (三毛猫ホームズの追跡)

\*洗濯物を干したら通れなくなって、狭いもの

一方で、〈程度〉を表す場合に、連用動詞句が用いられないわけではない。しかし、収集した用例は、次のような慣用的な表現に限られているため、概ね交替は不可能であるといえるだろう。なお、(92)～(94)は連体動詞句と交替可能であろう。

- (92) 丸裸からたたき上げ、ここまでにした大三から見ると、大器ははがゆさを乗り越えて、苛立たしい存在であった。(仮面学園殺人事件)  
はがゆさを乗り越えた苛立たしい存在
- (93) 河合先生はソニー・ロリンズとだいたい同じ年代だと思うけれど、ロリンズ氏に負けず劣らずパワフルな方であった。(うずまき猫のみつけかた)  
ロリンズ氏に負けず劣らぬパワフルな方
- (94) 岡田がいつにも増して、重い足取りだったのは、… (勝手にしゃべる女)  
いつにも増した重い足取り

次に<様態>の例をみてみよう。このタイプの例であると判断するのに、連体動詞句とXの間に「ような」を介して言えるかどうかを手がかりにした。

- (95) 彼は父と違って、当初からある計画を拵らえて、自然をその計画通りに強いる古風な人ではなかった。(それから)  
\*当初からある計画を拵らえて、自然をその計画通りに強いて古風な人
- (96) …いずれにせよこういう感興はフル・マラソンを走ったときにしか感じることのできないとくべつなものである。(うずまき猫のみつけかた)  
\*フル・マラソンを走ったときにしか感じることのできずにとくべつなもの
- (97) …ニクイほど沈着冷静な女の子だが、また彼女はとても頑固にその美意識を守る優雅な生活者でもある。(さようならなんてこわくない)  
\*とても頑固にその美意識を守って優雅な生活者
- (98) ……さて俺がこんな風に告白をはじめると、君は俺のことを、相手かまわず身の上話をやりだす哀れな病人だと思うだろうが、… (銀閣寺)  
\*相手かまわず身の上話をやりだして哀れな病人
- (99) いいかげん摩滅した絨毯は、濃い赤の地になんだかわけの分からない柄を織り出した、趣味の悪い安物だった。(イギリスは愉快だ)  
\*濃い赤の地になんだかわけの分からない柄を織り出して、趣味の悪い安物
- (100) 胃を吐きだして吠える、不安な犬。(砂の女)  
\*胃を吐きだして吠えて不安な犬

たとえば、(96)は「ほど」を介しても言うことができ、<程度>と<様態>の境界例である。このような例もあるが、いずれにしろ<様態><程度>のどちらの場合も交替不可能である。

最後に、動詞述語句が<原因・理由>の意味でXを修飾している場合をみてみよう。「XなN」に先だつ形式が、連体動詞句であるよりも、どちらかという連用動詞句であるほうが<

原因・理由>の意味を明確に読み取ることができる。さらに、「XなN」に先だつ連用動詞句のほとんどが、Xの<原因・理由>を表して用いられている。したがって、まず連用動詞句の例からみてみよう。

- (75) 風が吹き抜けて、寒い日だった。(ふたり)

風が吹き抜ける、寒い日

- (101) やはりここは空気が動かずしめっぽい場所なのだろう。(パズル)

空気が動かないしめっぽい場所

- (102) 「円妙寺の和尚さんも、こつたらめんこい孫が三人も来て、いい正月だなあ」

こつたらめんこい孫が三人も来る、いい正月だなあ (鉄道員)

- (103) 「金がよほど余っていて、使い切れない金持ちかもしれんじゃないか」

金がよほど余っている、使い切れない金持ち (三毛猫ホームズの追跡)

- (104) 「車なんか乗って、ナンパな野郎たちだ」(無印失恋物語)

車なんか乗る、ナンパな野郎たち

- (105) 口づけの一瞬をとらえて、印象的な比喩だ。(三十一文字のパレット)

口づけの一瞬をとらえた、印象的な比喩

次に、連体動詞句がXの<原因・理由>を表しているものと思われるものをあげる。

- (74) 季節は梅雨入り前の、照りつける暑い毎日である。(金閣寺)

照りつけて暑い

- (106) 当日は幸いに、五月にめずらしい曇った鬱陶しい天気であった。(金閣寺)

曇って鬱陶しい

- (107) 雪がたくさん降っていた、真っ白い午後だった。(サンクチュアリ)

雪がたくさん降っていて、真っ白い

- (108) これは随分と人生を豊かにするトクな性分だと思う (さようならなんてこわくない)

随分と人生を豊かにしてトクな性分

以上のように、<原因・理由>の用法における「XなN」に先だつ動詞述語句は、連体と連用の交替が可能である。

### 3. まとめ

- 1) 名詞句「XなN」に先だつ修飾成分には、連体修飾成分としてノ格の名詞、形容詞・形容動詞の連体形、「ような」「ほどの」「そうな」「という」の各形式に導かれる連体修飾句、連体動詞句がある。また、連用修飾成分として、副詞、形容詞・形容動詞の連用形、「ように」「ほど」に導かれる連用修飾句、連用動詞句がある。



- 2) このうち、一部の例外を除いて、ノ格の名詞はNを、副詞はXを修飾している。また、この二つの形式において連体と連用の交替は基本的に不可能である。
- 3) 形容詞・形容動詞が用いられる場合には、交替可能である。形容詞・形容動詞が「XなN」に先だつとき、Xと並列して対等にNを修飾する用法、すなわち並列用法を主とする。したがって、主として並列用法において交替可能だといえる。
- 4) 特定の形式によって作られる修飾句のうち「ような/ように」「ほどの/ほど」の場合に交替可能である。これは形容詞Xが表す性質を、〈程度〉〈様態〉の面から修飾する用法である。
- 5) 「そうな」「という」は交替不可能である。「そうな」の修飾句はXを様態の面から修飾し、意味的には連用修飾的である。一方、「という」は「XなN」を全体として修飾している。
- 6) 動詞述語句が先行する場合、〈原因・理由〉を表す用法において交替可能である。しかし、並列用法、修飾用法の〈程度〉〈様態〉を表す用法では、もっぱら連体動詞句が用いられている。連体動詞句は連体形でありながら、修飾用法において意味的には形容詞Xを修飾し、連用的なはたらきをしている。

以上をまとめると、形容詞・形容動詞では主として並列用法において交替が可能である。「ような/ように」「ほどの/ほど」に導かれる句では、もっぱら修飾用法において交替が可能である。動詞述語句になると交替は弱まり、連体動詞句が修飾用法で、意味上、連用的なはたらきをするようになる。

### 【注】

- 1) 形式が異なれば必ず意味も異なる。こうした観点からの厳密な意味の差異についての議論に、本稿では立ち入らない。なお、本文中では「意味は同じである」「意味に変化はない」など概略的な表現を用いている。
- 2) 文中の成分における連体と連用の機能のちがいが文の意味に差異をもたらさない事態については、すでに奥津（2007）が指摘し、補語と述語が表す意味関係においてみられるその成立条件を考察している。
  - (c) 波が 白い泡を たてて 押しよせる。
  - (d) 波が 白く 泡を たてて 押しよせる。筆者は、名詞句内においても同じような現象が見られることに注目し、拙稿（2012）（2013）で「N 1 のような/ようにXなN 2」の場合について考察してきた。
- 3) 連体詞の中の、形容詞と同じようにモノの性質を表す、「大きな」「小さな」なども含む。
- 4) 名詞句内における連体・連用の交替現象と、奥津（2007）に扱われている文構造の中での交替現象との相違についての考察は、今後の課題として残されている。なお、このような名詞句内における連体・連用の交替は、今後、連体修飾句における文法現象の一つとして位置づけていくことにしている。
- 5) 「XなN」に先だつていても、「その日は殊に波のおだやかな日だった。（友情）」のようなノ格は形容詞が表す述語の主格となるもので、この場合にあてはまらない。
- 6) 鈴木康之（1978）は、「三つ」「すべて」など数量を意味する名詞、「うしろ」「そば」など境遇的な名詞、「ほど」「つもり」など形式名詞を除く）ノ格の名詞と名詞との連語のタイプを考察している。ここでは、まず基本的に三つのタイプがあるとして、「関係的なむすびつき」「状況的なむすびつき」「規定的なむすびつき」をあげ、それぞれ下位分類をおこなっている。
- 7) 工藤（1983）を参考に分類。
- 8) 否定と呼応する副詞は、次のように、名詞句の外の述語形式と呼応することが多い。
  - …ここは、ちつとも陰気な感じじゃない。（夏の庭）
  - 「カリビアン」はさほど大きな店ではない。（返事はいらぬ）

### 【参考文献】

- 奥津敬一郎（2007）『連体即連用？』ひつじ書房。
- 工藤浩（1983）「程度副詞をめぐって」渡辺実編『副用語の研究』明治書院pp.176-198。
- 鈴木康之（1978）「ノ格の名詞と名詞とのくみあわせ（1）」『教育国語』55, むぎ書房pp.12-24。
- 光信仁美（2012）「名詞句における「ような」と「ように」の交替—比況用法の場合—」『立正大学国語国文』50,pp.1-9。

(2013) 「「ような」と「ように」の交替—名詞句「N1のようなXなN2」における—」『関西外国語  
大学 研究論集』97, pp.267-284.

### 【考察対象の用例の出典】

湯本香樹実『夏の庭』新潮文庫/赤川次郎『死体は眠らない』角川文庫/夏目漱石『門』岩波文庫/吉本ば  
なな『うたかた/サンクチュアリ』角川文庫/三浦綾子『小さな郵便車』角川文庫/乃南アサ『花盗人』新  
潮文庫/夏目漱石『こころ』新潮文庫/群ようこ『本棚から猫じゃらし』新潮文庫/林望『帰らぬ日遠い昔』  
講談社文庫/馳星周『不夜城』角川文庫/さくらももこ『モモのかんづめ』集英社/さくらももこ『そうい  
うふうにできている』新潮文庫/群ようこ『ホンの本音』角川文庫/宮本輝『彗星物語』文春文庫/吉本ば  
なな『キッチン』角川文庫/山田詠美『私は変温動物』新潮文庫/林望『イギリスは愉快だ』文春文庫/原  
田宗典『むむむの日々』集英社/安岡章太郎『アメリカ感情旅行』岩波新書/夏目漱石『それから』新潮文  
庫/北杜夫『どくとるマンボウ昆虫記』新潮文庫/五木寛之『生きるヒント4』角川文庫/俵万智『三十一  
文字のパレット』中公文庫/向田邦子『あ・うん』文春文庫/TDL研究会議『ディズニーランド101の謎』  
新潮文庫/柳美里『家族の標本』角川文庫/向田邦子『思い出トランプ』新潮文庫/太宰治『人間失格』新  
潮文庫/村山由佳『きみのためにできること』集英社文庫/赤川次郎『ふたり』新潮文庫/林真理子『バル  
セロナの休日』角川文庫/中沢けい『風のことは海の記憶』中公文庫/銀色夏生『散歩とおやつ』角川文庫  
/山田詠美『ぼくは勉強ができない』新潮文庫/太宰治『斜陽』新潮文庫/赤川次郎『天使と悪魔』角川文  
庫/宮尾登美子『松風の家』文春文庫/三島由紀夫『金閣寺』新潮文庫/乃南アサ『夜離れ』幻冬舎文庫/幸  
田文『おとうと』新潮文庫/群ようこ『無印失恋物語』角川文庫/宗田理『仮面学園殺人事件』角川文庫/  
吉本ばなな『哀しい予感』角川文庫/壺井栄『二十四の瞳』角川文庫/安部公房『砂の女』新潮文庫/中場  
利一『岸和田少年愚連隊』幻冬舎文庫/赤川次郎『勝手にしゃべる女』新潮文庫/武者小路実篤『友情』新  
潮文庫/浅田次郎『鉄道員』集英社文庫/赤川次郎『三毛猫ホームズの追跡』角川文庫/柳美里『水辺のゆ  
りかご』角川文庫/村上春樹『うずまき猫の見つけかた』新潮文庫/桐島洋子『さよならなんてこわくない』  
角川文庫/銀色夏生『つれづれノート』角川文庫/宮部みゆき『返事はいらない』新潮文庫/井上ひさし『ブ  
ンとブン』新潮文庫/恩田陸『パズル』祥伝社文庫

(本文では紙幅の関係上、一部書名を省略して表記している場合がある。)

(みつのぶ・ひとみ 国際言語学部准教授)